

# ふくしま森林文化フォーラム 講演集

～ふくしまの森林文化とは～

平成20年1月

福島県

このフォーラムは、森林環境税を活用して開催しました

## フォーラム開催概要

開催日 平成20年1月20日（日）

開催場所 杉妻会館（福島市）

主催 福島県

参加者 約200名

次第 挨拶：福島県森林林業領域総括参事 渡部 卓治

基調講演：「森林と文化」

山形大学名誉教授 北村 昌美氏

パネルディスカッション

コーディネーター：赤坂 憲雄氏（福島県立博物館長）

パネラー： 佐々木長生氏（福島県立博物館専門学芸員）

新国 勇氏（只見町ブナセンター）

若林 繁氏（福島県文化振興グループ参事）

## 講師プロフィール

### 北村 昌美氏

1926年兵庫県生まれ。京都大学農学部卒業。

現在、山形大学名誉教授、鶴岡市森林文化都市研究会長。

専攻は、森林学。各国の森林意識に関する調査を長年実施し、多くの研究成果をあげながら、日本人の自然認識、森林と文化の関係に思索を深め、「森林文化論」という新しい学問領域を開拓している。

### 赤坂 憲雄氏

1953年東京都生まれ。東京大学文学部卒業。

現在、福島県立博物館長、東北芸術工科大学大学院長、同東北文化研究センター所長。

専攻は民俗学・東北文化論。東北一円を聞き書きのフィールドとして、野辺歩きの旅を重ね、埋もれた歴史や文化を掘り起こしながら、「いくつもの日本」を抱いた新たな列島の民族史の地平を切り開くために、東北学の構築を目指している。

### 佐々木長生氏

1949年南相馬市（旧鹿島町）生まれ。東北学院大学大学院文学部史学科修士課程修了。

現在、福島県立博物館専門学芸員。

会津農書を中心に会津地方の民具や、民俗学を研究している。

### 新国 勇氏

1957年只見町生まれ。

現在、只見町役場総務企画課企画班長。

只見町史編さん事業に従事するとともに、ブナ林の総合学術調査に参加し、世界ブナ・サミットの開催にも携わる。

只見町ブナセンターの設置にも尽力し、ブナを活かした町づくりを目指している。

### 若林 繁氏

1948年東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。

現在、福島県生活環境部文化振興グループ参事。長年にわたり福島県内の仏像の調査研究を行い、特に会津地方の仏教文化の奥深さを提言するなど、新たな地域資源の掘り起こしを進めている。



## 基調講演「森林と文化」

山形大学名誉教授 北村昌美氏

### 1. はじめに

私は、森林文化というものを提唱して、これからは森林文化の時代だというような事を書いたりしています。20年ほど前に「森林と文化」という本を出しましたが、これは一度まとめ直す必要があるだろうという事で、原稿だけは新たに出来たところです。そんな事で森林文化を判っているものの様に話しているのですが実はよく判らないのです。

私が住んでいる山形県の鶴岡市は、大合併をしまして1万ヘクタールの森林が10倍近くになりました。そこで鶴岡市のこれからの方向について、私は「森林文化都市鶴岡」というのを打ち出した訳です。森林が増えたという事は、合併して下さった地域の方々にも報いるという気持もありますし、それだけ森林が有るという事は日本全体でも珍しい事ですからこれを生かさないといい事で森林文化都市という構想を打ち出したのですが、幸い鶴岡市長はそれに賛意を表してくれまして、今、具体的に「森林文化都市鶴岡」というものを進めようとしております。ところが困った事に会う人会う人みんなに「森林文化都市って何ですか？」と訊かれて「いや判りません」と答えるとキョトンとしているわけです。実際には判らないんです。鶴岡市はこれから世界中でやってない森林文化都市というものを目標に掲げて進んでいこうという決意をしたばかりです。

私に言わせれば、森林文化とはかくかくしかじかだとそんな事を言ってみても何にもならないんですね。森林文化とは人間と森林の関係全体を云うのだと思っていけば良いのです。関係はいろいろあるけれども、その全体を森林文化として捉えればよろしいと思っています。

私は、この森林文化の中に「もの」としての側面と「心」の側面と両方があると思っています。「もの」は、形として残っている、事柄として残っている、あるいは記録として残っている、そういう我々が認識できる対象が「もの」ですが、それだけではなくて「心」の問題を我々は考えなければなりません。

「心」の問題で一番分かり易いのが、自然宗教ですね。山形県で言えば出羽三山の修験道などは有名ですが、世界中を見渡しますと、アイルランドのケルト民族の宗教観は、日本を含めた古い宗教を持っている国々とほとんど変わりがありません。これは非常に面白い所で、キリスト教化したヨーロッパとは異なるケルト民族の宗教観をもう一度洗い直そうと今心懸けております。

さて、「もの」の面と「心」の面と言いましたが、どちらにしても我々が森から授かるもの、恩恵としての森林文化と、もう一つは人間の方が森に対して貢献できるもの、森は喜ぶかどうか判りませんが、人間として森に対して何ができるかという事を考えた時に色々な内容が有り得る訳です。ですから、「もの」として授かったものもあるし、「もの」として貢献できるものもある。それから、「心」の面で授かったものもあるし、「心」の面で貢献できるものもある。こういうふ

うな事です。その中に自然保護の思想が包含されてしまえば、日本の自然保護の思想はおそらく奥行きのある物になるだろうと思います。ただ「伐るな!」「伐れ!」という問題じゃなくて、宗教観を根底に持ちながら自然と対応できるという様な事になるのではないかと思います。

このようなことが「心」の面です。「もの」の面に関しては森の機能として既に広く知られているので、私は「心」の問題についてここでは話をしていきたいと思います。

## 2. 森や樹木があるということの意味

「心」の問題で分かりやすい話としてキスカ島の話をしてします。太平洋戦争の類い希な成功した作戦といわれていますが、アッツ島とキスカ島を占領していた日本軍がアッツ島は玉砕してキスカ島は引き上げなきゃいかんというので霧にまぎれて無事に帰ってきた時の話です。キスカ島に行っていた兵隊が千島に帰ってきて、当時の日本の島を見ると木が生えている。「ああ、木がある。木がある。」と喜びの声をあげたということです。木が生えているだけでどうして感動するのですか？木というものが持っている意味が本当にありありと胸に迫る様に描かれていると私は思います。難しいことを言うよりも、こういった感動がどうやって与えられるかという事から木というものが持っている意味が理解されやすいと私は思っています。木があることが、どんなに兵隊に喜びを与えたかという事を感じさせられます。

それから、平成14年に山形県で全国植樹祭がございまして、その時のスローガンは我々一同が考えたものです。「感じていますか森がある幸せ」これはもう「心」そのものですよね。それまでは非常にけなげなことが書いてありました。「荒れた国土を緑で復旧しよう!」から始まって「生態系を壊すな!」「自然を守れ!」というふうな所へ移ってまいりまして、「緑の遺産を子孫に残そうではないか!」という様な感心なことが書いてあるのですが、平成14年のような雲を掴むようなスローガンは初めてだったと思います。「心」の問題ですよね、「感じていますか森がある幸せ」とは、なかなかうまく表しました。





### 3 . 樹木の備えている徳

樹木一本一本でもやっぱりそれぞれに意味があります。例えば、巨樹、巨木に対する畏敬の念というものは世界共通ですね。外国人の意識調査をしたものから引用しますと、95%ぐらいの外国人が巨樹に対して神々しい気持ちを抱くらしいんですね。皆さん無条件に畏敬の念を抱いているという事が判ります。そのうちで一番顕著なものがドルイド教の神木であるナラですね。「あなたの好きな木は何ですか？」という事を訊きますと、フランスでは断然ナラがトップなんです。ナラの下にずっと下がってブナとかモミとかトウヒが出て来る訳です。それに対してドイツではナラもブナもトウヒも大体同じなんですね。なぜフランスでナラがそれだけ好まれるかという、これがドルイド教の名残りですね。そういう様な事を色々考えますと、問題なのは、これが神木だということです。神木というのはしめ縄を張ってないといかんというふうに関連しますが、それは関係ないですよ。ナラの木の下で裁判が行われるとか、それぐらい神聖だと言われています。

そういう神木であるナラが尊崇されているという事と関連して、どうしても忘れてはならないのが昔の神様の行方ですね。ヨーロッパの昔の宗教は何処へ行ったのか？これはこれで面白い問題ですね。だいたいヨーロッパの森の中にはキリスト教の神様はいらっしゃらないわけです。森の中に神様はおりません。いわんや森が神様だという様な思想はありません。このへんが非常に面白い所で、常識的には多くのことが語られていますけど、もうちょっと極める必要があるのではないかと思っています。

ヨーロッパでは1つの宗教が1つの民族に対応していますが、日本では、そうでなくて宗教は色々なものがまとまって対象となっていますね。我々は特定の神様や仏様に対してではなくて、そういう何とも知れないものに対して「もったいない」とか「ありがたい」とか言いますが、これが日本の宗教ですね。

樹木の話語り出すとまだいっぱいあります。例えば、樹木には樹木の持っている徳というものがあります。人徳を備えた偉い人というのと同じように優れた部分のある樹木という事になる訳です。よっぽど梅の好きな人が選んだんだと思いますが梅の八徳というものがあるということです。「衆樹に魁（さきがけ）て咲き、目を楽しませる。」「鶯が来て鳴く」とか、「梅干にするとばい菌を殺す」とか。そして最後に書いてある事が面白いです。「これら梅の徳はどれひとつとして桜には無い。」桜ファンは怒るでしょうねえこれは。逆に桜の方から言わせれば、桜の徳というものを数え挙げるといっぱいあるでしょうね。ですから視点を変えますとそれぞれの木にそれぞれの徳がある。そういうものです。木一つ一つでも、森まで行かなくても、そういう事が宗教心の根底にあるんだと言う事を申し上げたい訳です。

ところで西欧で一般的に人気があるのは、先程、御神木でナラが出て来ましたが、ブナなんですね。私が山形大学に着任したばかりの時に直ぐ会津の山奥へ引っぱっていかれて、朝から晩まで地面を這いずり回ってブナの稚樹を調べた覚えがあります。ブナというものは研究の対象ではありましたが、当時あまり大切にされてはいませんでした。ブナ退治という言葉さえありました。ブナを伐ってスギを植えるというのが何よりも善行だった。そういう事をやって来た時代なわけです。

## 4 . 森の記憶

次は森の記憶です。此处を一番中心に述べたい訳です。

森はいろんなものを記憶している。もっときれいに言えば、森にはその土地の文化と文明が反映している。逆に言うと、森を見れば、その土地の文化と文明がわかる。福島県にお邪魔して、そういう目で山を見ていますと、実にいろいろな教訓が含まれておりますね。

森林環境税については、山形県も福島県の後を追うようにして導入を決めてもらった訳ですけども、そのときに、県民に判りやすく話してくれという事で副知事を含めて3人で公開の話し合いをしました。そこで話をした内容が、木村浩という方が『ロシアの美的世界』という本に書いてあることです。「ロシアの森には、ロシアの美しさも、豊かさも、不屈さも、従順さも、謙虚さも、闘志も、自信も、限りないなつかしさも、明日にかけの夢も、痛ましい思い出も、何もかもひとつの柔らかい調和の中に溶けこんでいる・・・」。モスクワ近郊のトゥーラの森を見て、木村浩というロシア文学者がこういうことを打たれたように感じたというんですね。私から言わせれば、こういうことを森林をやってる人から聞いたかったなあと本当に思います。なぜそうなのか、森が美しいという事に尽きるんだけど、文化と文明が森に反映している。反映した森の姿が、これだけ人の心を打つものであったということですね。森というものは、意味のあるものだ、価値のあるものだということを、山形県民のみなさんの前で披露した訳です。山形県では非常にすんなりと森林環境税に同意してくれました。山形の森が荒れてたら自分たちが馬鹿にされるんだ、そう思った人がいるんでしょうね。森というものはそういうものです。

## 5 . 森に投影した文化、文化に投影した森

何処の国でもそうですが、何で日本の森があるのかということを考えて見ましょう。日本に日本の森があるのは当たり前だと思っておりますけど、それは日本人がいるからですね。森を構成する樹種や、森の分布を決めるのは自然条件だけではないのです。日本人がいて森を創っているから、日本人が創った森として森がある訳です。文化と森の関係というのは、ものすごく密接につながっていると言えます。森に投影した文化、文化に投影した森、どっちを先に言っても良いと思いますけど、お互いこういう関係があるという事ですね。

私は、鶴岡の人とドイツに行ってシュバルツバルトを見せています。ライン川をはさんでフランス領とドイツ領があります。ライン川の西がフランスでヴォージュの森、東側がドイツでシュバルツバルトの森です。もともと一つだったのが、ライン川が陥没して二つに分かれたんですね。それが今はどうですか、歴然と二つの森は違うんですよ。何が違ったか。フランス人、厳密に言えばアルザス人ですね、一方にアルザス人、一方にドイツ人がいるから、まったく違う森が出来た。アルザス人とドイツ人の文化がそれぞれの森に反映して違う森に段々と仕上がっていったんです。

もっとすごいところは、ドイツのハルツの山地で、旧東西ドイツの境目にあるラグビーのボールみたいな格好で長径が100kmくらい短径が30kmくらいの森です。真ん中を東西ドイツの国境が横切っていた訳ですが、そうしますと東西分裂の間にどういうことが起こったか、政治形態によってどのように違う森が出来たか、研究したいと思っています。



## 6 . 森の価値を金銭的に評価できるか

これだけ文化が反映した森を我々はどう見るかということ、今の見方はどうでしょう？全部市場価値で計る訳でしょう。ここの森はいくら儲かるとか、どれだけ金銭的価値があるとか、そういう事をすぐ言います。世界ではそんな考えがまかり通っていますが、そんな評価ができるんですか。そんなことはけっして出来ません。

日本学術会議に農林水産省から計算してくれという諮問がありまして、私は反対しましたが計算しようという事になってしまったんです。計算できる分だけで年間70兆円分の利益を生んでみると、森はこんなに立派なもんだと世間様にお見せした訳です。みんな感心してくれると思ったかもしれませんが、そんなもの誰が感心しますか。70兆円って何？今まで見たことも考えたことも無い数字。私たちの身の回りで日常生活に関係があるのは7万円くらい、せいぜい70万円くらい。そこに70兆円というようなことを見せることは、市場価値で計算をするということの誤りと、不遜な態度の誤りと両方があります。ですから、森林は省みられなかった訳です。

## 7 . 森林文化の今後

森は文化的な存在である。森によって一国の文化が押し量られて世界から馬鹿にされる事もあるんですよと言ったほうがどれだけ国民を説得できるか判りませんね。市場価値で森を見ていくのは森の価値をどんどんおとしめるようなものです。森は文化的価値に着目してこそ存在意義があるんです。その森に相当の金額を国が投資しても惜しくないと思えば何の問題も無い訳です。そういうことをしないで、木材価格の動向に一喜一憂して森を立ち直らせようとしているのはおかしいんじゃないですか。すべては文化から始まるということを改めて申し上げたい訳です。

最後に、森林研究について触れます。文化と文明が森に反映している。その森が人の心を打つ。そういう森を創るのが、本来の林学の領域だったと私は考えております。あらゆる技術がこういう森を創るために使われてきたんだ、研究されてきたんだと考えると、林学の歩みは非常に輝かしいものであると思います。ところがどうでしょう。なんでも金銭的な計算で片付けようとするものですから、林学や林業は成り立たないのです。問題なのは、生産が第一で生産に伴うものとして色々な分野があるという林学の体制だと思います。生産を先頭に立ててきた体制を、森林文化を中心にして入れ替えたなら良いのですね。「文化森林学」というのも悪くない、それでもどこかちょっと違うなあという感じを今持っていますね、でもそれくらい文化というのを先頭に立てて森林を包括すれば、森林と人間の関係が全体として形を成してくると考えております。

## パネルディスカッション「ふくしまの森林文化」

コーディネーター 県立博物館長 赤坂憲雄氏



### 赤坂氏

基調講演をされた北村先生は、実はとても重要なことをさり気なくお話しなさっています。「森を構成する樹種や森の分布を決めるのは自然条件だけではない」というお話がありました。例えば、僕の大学に京都からお客さんが参りました。新幹線で福島から山形に入って来た、その京都のお客さんが言います。「いやあ、東北には雄大な自然がありますね。」それを聞いている山形の人たちはとても複雑な顔をしているのです。つまり「お前のところの東北には雄大な自然しか無いじゃないか。文化が無いじゃないか。」そういうふうに使われている様な気がするのです。北村先生の「森林文化」という考え方をそこに挿入してやりますと、まったく違った事が見えてきます。つまり、我々の目の前にある東北の自然、東北の森というのはそれ自体が東北に生きてきた人々が縄文時代以来1万年の時間を費やして創ってきた文化の結晶であると考えた時に、その雄大な自然こそが東北人が大切に育ててきた文化なのだ、我々はそれを文化として誇ることができる、というふうに読みかえることができます。

これまで森を眺める視点は、一つは自然としての森でした。もう一つはそれとは対極の様な経済としての森でした。自然と経済それしか無かったのです。そこに第3項として、「文化としての森」というものを置いてやる事によって森というものがまったく違って見えてくる。北村先生がこれまで語られてきた森林文化というものは、実は、そういう我々の森への眼差しを根底から覆す様な、画期的な問題提起を含んでおりました。森林環境税という形で森林を県民一人一人が守り育てていく、県民の共有財産として育てていくという事が当たり前の時代になってまいりました。その中で森を文化として守り育てる、そのために我々は何を成し得るのか。文化であるが故に我々は森の将来に責任を持たされている、責任を問われているのだと考えたいですね。

今日は3人のパネラーの方達から、それぞれの分野が全く違いますので、異なった森への眼差しという事を問題提起として伺いたいと思います。





## 若林氏 「森林と木彫像」

私がこれからお話しするのは実は福島の仏像の事なのです。仏像と森とがいったい何の関係があるのかとお思いでしょうが、実は平安時代以降の仏像というのは大半が木で造られている。まさに日本の仏像彫刻は木を中心として発展して来たと言って良いでしょうね。どうゆう具合に仏像が木と関わってきたのかを、福島市の小倉寺という所にあります大蔵寺の仏像を中心としてお話をします。

大蔵寺の収蔵庫の中心に安置されております千手観音で、大事なのは頭から体の像の中心の部分でありまして、この仏像は約4メートルの大きさがあります。(写真1)そして頭部から身体の中心の部分がカヤの一材から彫り出されている一木造りという技法で作られているのですね。この千手観音はおよそ10世紀の作と考えられております。

次は大蔵寺の仏像の中では最も古い部類で9世紀のもので。(写真2)非常に破損がひどく手なども失われております。大体165センチほどの高さがあり、現在残っている部分は全てケヤキの一材なのです。そして注目されるのは、背中から見たところなのですが、ここに長方形の穴が開いているのです。(写真3)ここから像の中を覗いて見ますと、像の中はきれいに貫けているのです。すなわち空洞になっているのです。元々はここの穴の所に蓋が当てられておりました塞いでいたのですがその蓋が無くなってしまったのですね。



写真1



写真2



写真3

これは元々像の中心に当た

るところが空洞になっている木、すなわち洞の有る木を使っているのですね。洞は大木には良くありえる事なのですが、そういう木の使い方が非常に珍しい特徴のある仏像です。

次は非常に破損のひどい仏像ですが、この仏像も全て一本の木なのです。(写真4)この仏像で破損が非常に特徴的なのは、顔のところ完全に潰れているのですね。よくよく近づいて見てみますと、どうも顔の中心の辺りに節があったようです。その節が腐食が進み外からの何らかの影響があって飛んでしまって、目鼻立ちが全て潰れたように無くなってしまった。このように節があったためにお顔が破損した仏像は他にもあります。お顔という重要な箇所にも節がある材をあえて使っている訳ですね。



写真4

いちぼく  
一木造りで申しますとこれは四天王であります。(写真5)一木造りと申しましても像の中心になる部分が一本の木であれば一木造りと申していますけど、こちらの仏像の場合は腰に当てています手の指先まで一本の木から彫り出しています。徹底的に一木というものにこだわっているそういう彫刻なのです。この仏像だけでなく、徹底的ないちぼくの仏像というものが、福島県内全県にわたって多く見られます。

一木は一木なのですが仏像にとって顔というのは一番大事なのです。その顔のあるところに節のある材です。更には、像の中心の部分が空洞になっている材、洞のある材をあえて使っているのですね。普通ならばそういう材は仏像彫刻としては悪い材ですからはじく筈なのです。ところがあえてそういう材を使っているという事は、この仏像を作った木材そのものに意味がある。先程の基調講演でも北村先生からありましたが、これらの仏像が造られた材はまさに霊木なのです。そのことを示すかの様に江戸時代に書かれた信達風土雑記の中に大蔵寺の縁起がありまして、大蔵寺の仏像を造る時に信夫の山中(信夫山と考えて良い)にある霊木をもって造ったという様な事が書いてある。

まさに大きな立派な木は霊木としてその土地の人々に信仰されてきた。そういう材で仏像を造る、これ即ち我が国の在地の神様に対する信仰ですね。仏教はインドから中国を経て我が国に伝わってきたもので、外来の宗教と在地の信仰が見事に融合しているのが我が国の仏教のあり方でして、同時に在地の神様に対する信仰を背景に持って仏像が造られている。そして、そういう形というものは都(京都)ではなくて東北により濃い形で残っているのです。



写真5



## 佐々木氏 「民俗から見た森林文化」

私は、伝承や民具などから庶民の生活の歴史を辿る民俗学の立場から福島の森林文化についてお話しします。

私が勤務しております県立博物館では昨年「木と竹 - 列島の文化、北から南 - 」と題して、鹿児島県歴史資料センター黎明館と共同で企画展を開催しました。先程の北村先生の話にあります様に私達の方はブナ林を中心とした落葉広葉樹林帯で、鹿児島の方は常緑樹である照葉樹林帯と呼ばれる地域です。そこでお互いの植生の違いから来る文化の違いを見ていこうと言うのが今回の企画展でありました。私達の地域は、樹皮の編物、剝物(くりもの)等、多くの豊富な木の文化的なもの、鹿児島は竹を中心にしたものを展示しました。これらを良く見てみますと、北の方は福島から北海道、そしてアムール川流域から黒龍江省の大陸まで繋がっていく。一方、南の方は薩摩から沖縄、東シナ海からラオス、フィリピンの方へ繋がっていく。日本海や東シナ海を囲んだ一つの大きな湖の様な世界観がある。これが、赤坂さんの言葉で言うところ「東アジア内海世界」というものです。

さて、只見町には水林というのが里の近くに在りまして、ここは一切木を伐っちゃいけない、たとえ子どもであろうと団子刺しの団子の木を取ってきてもいけない、そういう事を子どもたち



写真 6



写真 7



写真 8

にしつけるのも共同体の秩序なんだと聞きました。もう一つ、旧田子倉にヨキ止めの山というのがあります。ヨキすなわち鉞（まさかり）です。ここも一切木を伐ってはいけない森です。これらは水源なんですね。里に水を供給する場所、それが森だったのです。そういったことが近年まで行われてきて水が守られているのです。

魚、山菜、木材、獣、鳥、そういったもの全てを山の神が恵んでくれるという信仰があります。山の神がおられて山の神が与えてくれる、そのために人が山に入る時は山を精霊として見る。里から山への入り口にはブナの大木とか杉の大木があり、これを山の神のマツリギと呼び、そこから先は山の神が領有する聖域とした。（写真 6、7）正月二日には、山入りと言って注連縄（しめなわ）を作ってあげます。（写真 8）共同狩猟の時にはマツリギの所で、山中安全でありますように、豊猟にして下さい、と願掛けをしていきます。山の神の聖域では、里の言葉を一切使っちゃいけない、日常使っている言葉を使わないで、山言葉を使って全ての会話をします。血であればノリとか、お月様であればイデシとか、その様な山言葉があります。本来だと、この山言葉もここでは喋っちゃいけないそうです。これを犯したら褌をさせたり、雪で身体を拭かせたりするといひます。

山のめぐみである水で米を作るという事から農家の方も山を信心してゆきます。飯館村佐須の山の神がありますが、ここでは、1月17日に新しい米で一切女性の手を借りないで餅をついて、豊作を祈ります。また、西会津、野沢の山の神は6月1日から一ヶ月間行いますが、山の神講という講を組んで御参りをします。

相馬地方の原釜地方では吾妻小富士が沖の方からぼつんと見えると、これを目印に松川浦、原釜の方に帰って来るとか、山を目印に「山占め」といって三角点を取りまして、良い漁場を記憶するということがあります。そのために漁師も山を信仰します。

こうして見ますと山の神は里だけでなく、農家や漁師にも信仰されています。山が原点であり、祖霊である。山が全てを恵んでくれる。それが森であり、それを小さくしたのが鎮守の森の信仰となっています。

山には死んだ人の靈魂が還るという信仰もあります。猪苗代湖周辺のハヤマ信仰、阿武隈山中のハヤマ信仰などがそれです。春になると山の神が下りてきて田の神となって一年間子孫を見守ってそして収穫後に山に還るのだと言うのがこのハヤマ信仰です。このように先祖の靈が山に

還ると言う信仰は古くからありまして、磐梯山もそうです。新しい御仏が磐梯山を通過して天にいくんだと言われてます。すなわち磐梯山というのは磐(いわ)の梯子の山と書いて磐梯山(ばんだいさん)と読みます。会津人の信仰が言葉として残っているのが、磐梯山(いわはしやま)とか磐梯神社(いわはしじんじゃ)なのです。

このように福島県内の文化を見る時に、民俗的に見ると、やはり森林文化というものから、政治的な歴史とは違った新しい歴史や文化が見えてくるんじゃないかと思えます。福島は海は大変きれいな海です。海岸線もきれいです。そして山もきれいです。こういうふうにしてみますと、やはり福島は「森が創ったつつくしまふくしま」だとその様な気がします。

## 新国氏 「ブナと生きる町を目指して」



「自然首都・只見 ブナと生きる町をめざして」というタイトルでお話しします。

平成19年4月、国内最大級の森林保護地帯が誕生しました。これが「奥会津森林生態系保護地域」で、福島県の金山町、只見町、檜枝岐村、旧伊南村、旧館岩村にまたがる一体の国有林83,573ヘクタールです。ここは原生的で将来にわたって保護すべき森林という事で林野庁が指定したものです。日本で一番広い保護林で、世界自然遺産の白神山地、屋久島、知床を大きく上回る規模です。この地域は、森林生態系保護地域のほか、自然公園の国立、国定、県立など二重、三重に鎧のようにまとわれている所なのです。ですからそれだけ自然度が高い地域と言えます。

只見町の自然の特色の一つ目は、ブナ林にあります。(写真9)只見町のブナ林の特徴は、原生的ということです。極力手が入ってないブナ林が多いのです。その次に、幹廻りが太い。環境省による巨木の定義は地上1.2メートルの高さで幹廻りが3メートル以上ということですが、うちの方のブナには幹廻り3メートル、4メートルのブナが普通にあります。もう一つ、巨木になりますと樹高も高くなります。樹高30メートルはざらにあります。巨木の密度も高い。その次に面積が広い。

特色の二つ目は、<sup>せつしょく</sup>雪食地形です。只見町に来られますと、急峻でそそり立ったような山がたくさん見られます。いっぱい縦筋のついたガリガリした山です。これらの山は雪崩で浸食されたもので、雪食地形と呼ばれています。3月から5月にかけて発生する雪崩の底には岩屑とか石屑が入っています。それらが山の斜面をヤスリで削り落とす様な感じで浸食します。雪食地形は、北海道から富山県までありますが、一番発達しているのが奥会津、只見地域になります。外国にもありますが、森林帯で人里近くで見られる雪食地形は世界でここだけです。

特色の三つ目は、雪に適応した植物がたくさん自生しているということです。尾根をふちどるキタゴヨウ、斜面にはミヤマナラという雪崩に適応した樹種が生育して



写真9



います。トガクシショウマ、シラネアオイ、ツルシキミ、ユキグニミツバツツジ、ユキツバキなどの雪に適応した植物が発達しております。

特色の四つ目は、川沿いを被う豊かな水辺林です。(写真10) シロヤナギ、トチノキ、カツラなどの水辺林がとても良く発達しています。その中でもユビソヤナギという絶滅危惧種に指定されているヤナギがあり、日本固有種ですから世界一の自生地と言って良いと思います。



写真10

特色の五つ目は、多種多様な生き物が生息しているということです。ブッポウソウ、イヌワシ、クマタカ、コテングコウモリ、ニホンカモシカなどです。特にクロホオヒゲコウモリは日本で一番小さく4グラムぐらいの手のひらに入るほどのコウモリで国内ではまだ40数個体しか発見されていないのですが、只見町では25個体も確認されて国内で最も生息数の多い地域となっています。(写真11) 小さくて移動力のないコウモリですから、ブナ林が無くなればこのコウモリも生息できなくなるというくらい貴重なコウモリなんですけど、これがたくさんいます。



写真11

これらの特色を総括すると、ここは世界遺産級であろうということです。平成4年から17年まで14年間ほど学術調査を実施し、いろいろなデータが集積されて貴重種が発見され、その結果として自然の価値付けがされたということです。

一昨年、町の第六次振興計画がつくられましたが、その表題が「ブナと生きる町、雪と暮らす町」とされ、昨年5月には只見町ブナセンターをつくりました。建物は無いですが、子どもブナサミットを開催したり、散策コースを見つけたり、ガイド・インストラクターを養成したり、小中高校生の総合的な学習を行ったり、住民や教師の観察会を行ったり、いろいろなことをやっています。

最後に、昨年7月、自然の中心地は只見という「自然首都・只見」宣言をさせていただきました。(写真12) このようにして町のブランド力を高め活性化を図ろうとしています。3年前に世界ブナサミットを開催しました。今年は6月21・22日に第2回目の世界ブナサミットを行う計画を進めております。ぜひご参加いただきたいと思います。



写真12



## 赤坂氏

三人のパネラーの方にお話をさせていただきましたが、僕の方から整理をさせていただきます。

一つは、我々が「森」「森林」と言っている生態環境、文化環境を、近年は「里山」と「奥山」に分けます。これはとても重要な事だと思います。

一時「木を伐る」「木を植える」というのが「悪」と「善」に振り分けられる様な、ある種ヒステリックな反応がしばしば見受けられました。木を植える人は正義の味方で、木を伐る人は悪い人みたいなイメージが作られていたのです。ところが我々は木を伐らずには生きて生けない。家だってそうだし、薪だってそうだし、木によって我々の暮らしのかなりの部分が作られている。そういう事を考えると「木を伐る」「木を伐らない」「木を植えると」といった事について少し醒めた目で見とくべきだなという事をずっと思ってきました。

新国さんの報告は奥山の木を伐らない事によって保全、保護していくべき原生的な森なんですね。この森まで、ついこの間まででしょうか、皆伐という形で乱伐をしてしまった。それが生態系を大きく壊して水源林すら破壊するような事をしてしまった。それに対する反省はあると思います。ですから奥会津のブナ林も北村先生がお話になっていましたけども、50年前に入った時には本当に大きな木があった、けれども奥山のブナ林さえ皆伐してきた歴史がある。でも今、我々の時代には、むしろそうした原生的なブナの森というのは人類の共有財産として守っていくべき森だという認識は一応持たれている。

若林さんは仏像のお話でしたけど、たぶん、我々にとっての森の文化の一つの原風景が語られていたと思います。仏像というのは会津にとって「仏都会津」という言葉が語られていますけど、会津の仏像文化を支えてきたのは原生的な奥会津のブナ林であったと、そこから木が、霊木が切り出され、仏像という形で表現され、人々の精神文化のもっとも深いところを形作って来たのではないかと思います。

我々の分野でいえば、丸木舟がかつては一木造りであったと思います。船というのは一木造りであるので、ほとんど仏像を造るときの木を切り出すときと同じ儀礼が丸木舟を造る時も行われていた。そして次第に大きな巨木が無くなってきますと船は組み立て式の船になる訳ですけど、船大工の人たちは可能な限り一木から切り出した木で組み立てるのがいいんだと語りますね。やはりそこにも人間と木の、人間と森との最も深いところに横たわる、北村先生の言われた心の風景、精神的な風景が横たわっているのだと思います。

そして「里山」と「奥山」という区別がなぜ決定的に重要なのか、僕は北村先生の本を読ませていただいたり御講義を聞かせて頂いたりしながら、ドイツのシュバルツバルトの森を是非見たいと思いついて去年行って来ました。シュバルツバルトの黒い森は全く人為的な森になっているのです。「ドイツの森の中には野生は存在しません。」という言葉聞いたとき衝撃を受けました。ドイツの人たちがすでに野生というものをほとんど失ってしまった人為的な自然に取り囲まれている中で、人と自然の関係をどういうふうに語っているか、それをモデルに日本の自然に向かい合う方法を組み立てていいのだろうか、つまり我々の自然、特に東北には、奥山に豊かな野生を抱え込んでいるんだ、新国さんの話はまさに野性的な自然ですね、その野性的な自然を抱え込んでいるこの場所で人と自然との関係、人と森との関係をどの様に作っていったら良いか、やっぱりドイツをモデルにする事は出来ない。ヨーロッパではなくて我々自



身の風土や文化の中に森や自然との関係というのを見つめなおす事によってしか、新しいモラルや森と共に生きる術といったものが生まれてこないのではないかと。

そういう意味で佐々木さんが様々に報告して下さいました民俗学的な森への眼差し、人と森との関わりといったことが大切な手がかりになると感じています。例えば鎮守の森の話が少し出ましたが、関西の方の学者たちが鎮守の森を様々に始めています。そして興味深い事に、関東以南の鎮守の森は照葉樹林なのです。照葉樹林が広がっていたところが開発、開拓されて唯一照葉樹の原生的なものを残しているのが鎮守の森、神社の森になっているのです。ところが東北を歩いている民俗学者の我々の感覚からすると、どうも西の方の鎮守の森という感覚が無いのです。なぜなのか、東北の山の村を訪ねると、氏神は、鎮守の神様は山の神だからです。山の村では山菜、キノコを採る、薪を採る、炭を焼くあるいは狩をすとか山と関わりのある暮らしをしています。このような村で山の神様がどういふふうに祀られているかというと、その山里から山への入り口のマツリギに山の神様が祀られている。佐々木さんが言った、山の神のマツリギとか山の神の神木とか色々な名前と呼ばれていますけど、山里と山との境あたりにあり、そして里山と奥山の境にもまた山の神様が祀られている。つまり鎮守の森という形で島のように残っているのではなくて、むしろ山の村の背後に山の神様の社や神社が祀られていて、その背後に新国さんの説明に出てきたような原生的な森を抱え込んでいます。そして原生的な森の奥深くには野生動物を抱え込んでいます。それが我々の自然との関係であり、文化としての森なのではないかと考えた時に、おのずと我々が向かうべき方向性が見えてきているのではないかと思います。

明らかなのは、木を伐る事によって更新していく里山的な自然と、木を伐らずに守るべき奥山や神社の周辺の鎮守の森という、いくつもの多様な森があるのだという事です。ですから我々は森の多様性に即した形で森との付き合い方というのを多様に組み立てていかななくては行けない。そこには東北に積み上げられてきた1万年の縄文以来の文化というものが、そしてその中には、人間たちの森と付き合う知恵や、技や、世界観、心や精神の在り方、信仰、宗教といったものがある。それを我々は一つ一つ掘り起こして、森と付き合う新しいスタイル、モラルや思想といったものを創っていかなくては行けない時代に入ったのだという事を、三人のお話をお聞きして考えました。

北村先生の御講演を我々は肝に銘じておきたい。森林とは文化である。文化としての森というものに我々は向かい合っている。だからこそ我々はそれを文化として守り、育てて次代へと受け継いでいく責務があるんだと感じています。我々が森というものを、文化としての森というものをこれからきちんと考えていく、今日がそういう一つのきっかけになってくれればよいなと思います。お付き合い頂きありがとうございました。



# 森林文化のくに・ふくしま県民憲章

(前文)

ふくしまには豊かな森林、そして清流、湖沼、海、澄んだ空があります。

私たちは、遠い祖先のころから、森林に育まれた多くのいのちの一員として生きてきました。そして、森林に感謝し、畏れ敬い、多彩な森林文化を育みながら、人や物を大切に<sup>おそ</sup>する優しい心も深めてきました。

しかし、ときにこの感謝や畏れ敬う<sup>おそ</sup>気持ちを忘れ、母なる森林やそこに棲む多くのいのちを傷つけることもしました。

今、私たちは、ふくしまの森林が未来も豊かであり続けるよう守り育て、その心を次世代に引き継ぐ責務があると考えます。

そのためには、私たち一人一人が、森林の恵みにより生活が支えられていることを理解し、森林づくりの大切さを考え、今できる身近なことから行動することが大切です。

私たち一人一人は、ここに、豊かな森林文化のくに・ふくしまを創ることを誓い、この憲章を制定します。

(本文)

わたしたちは、

- 1 森林を敬い、あらゆるいのちを尊びます。
- 2 森林にふれあい、心豊かに生きます。
- 3 森林の恵みに感謝し、活かします。
- 4 森林を守り育て、未来につなぎます。

福島県は、豊かな森林を守り育て、健全な状態で次の世代に引き継いでいくため、県民の合言葉となる「森林文化のくに・ふくしま県民憲章」を平成17年11月20日に制定しました。

表紙写真：第22回 ふくしま緑の写真コンクール 銅賞「緑の里」宮川悦子氏  
裏表紙写真：第22回 ふくしま緑の写真コンクール 入選「緑流」古閑喜典氏

## 【森林環境税に関するお問い合わせ先】

### 税の使いみちについて

福島県農林水産部森林計画課  
〒960-8670 福島市杉妻町2-16  
電話 024-521-7425  
HP [http://www.pref.fukushima.jp/forest\\_c/](http://www.pref.fukushima.jp/forest_c/)

### 税の仕組みについて

福島県総務部課税務課  
〒960-8670 福島市杉妻町2-16  
電話 024-521-7069  
HP <http://www.pref.fukushima.jp/zeimu/>